



あぜ草の使い途

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 理事

中澤 伸夫

毎年8月1日は私の地区の共同墓地清掃デーである。8月13日の月遅れ盆迎え火に備え、この日早朝から「3密」を避けつつ、それぞれの墓所周りの草を刈りきれいにしている。墓地周縁など一帯の草刈りは役員の仕事で、刈り払い機を使い、今年は長雨の影響か例年以上に生い茂った草を刈る。道路際もいつもの環境整備行事がコロナ禍の事情で中止になったせいか、アスファルトの境目や隙間に大型で丈の長い草がびっしり生えた。ヒメジョオン、ヒメムカシヨモギ、アカザなど。見苦しく交通安全の妨げにもなるので役員が刈り取るが、問題は刈草の始末である。いつも悩みの種となる。

公共用地で発生したもののなので、専用の「燃えるゴミ」袋に詰めて集積所に運べば、市が無料で処分してくれる。青草のままより、数日干しておけば軽くなるのに、と内心思いながら、人手のあるうちにと、黙々と何十かのビニール袋に満杯の草を詰め込んだ。

考えてみればこれはエネルギーの無駄、CO₂排出など環境上の問題が多い。この青草は水分を多く含むので、おそらく燃料をかけて焼却される。市では生ゴミや草木の類は、なるべく堆肥化して有効利用するよう呼びかけているが、堆肥化する人も、それを利用する人も今は少数である。

本県（長野県）は一人あたりのゴミの排出量が全国一少ない県とされているのに、なぜこうなってしまったのか。

私が子供の頃は、どこの家庭でも、鶏やウサギ、ヤギ、羊などを普通に飼っていて、その飼料用に田のあぜ道などは格好の草刈り場であった。小家畜の餌確保は子供も役割を担った。動物により給餌される草に対し好き嫌いがあって、せっかく用意した草にそっぽを向かれ当惑したり、毒草はいけない、濡れた草はいけない、など家畜の世話の手伝いも案外骨が折れた記憶がある。

当時（昭和30年代頃）は、水田畦畔の草は有効に活用され、鍬であぜ塗りの上面はあぜ豆（大豆）を作り、通路部分に発生した草（雑草とは呼ばずあぜ草と言った）は飼料や堆肥にと、草を無駄に捨てることがなかった。棚田のような傾斜地であぜ草刈りが苦勞な場所でもよく管理され、自然な美観が保たれていた。上記のお墓から出た草も、当時であれば皆が喜んで持ち帰っただろうと思われる。

話を転ずるが、和辻哲郎著「風土」には「ヨーロッパには雑草がない」というくだりがある。日本人の感覚からすると本当？と驚くような話だが、西ヨーロッパは東アジアのモンスーンと異なり夏乾燥の気象であって、放任すればたちまち雑草で覆われる日本とはだいぶ様相が違うという。

和辻はヨーロッパの気候環境は穏やかであり、人間に従順で全体が「牧場」の地域であり、人間と自然がともに共生しているという。これに対して日本などモンスーン地域の特徴は「暑熱と湿潤」であり、自然が暴威を生むことから、一刻たりとも手を抜けば雑草に負けてしまう「闘う農業」の気候だと捉えている。これは「風土」論の基調となる考察である。

地球上で住む場所や気象環境など風土が異なると、雑草と農業生産との向き合い方が、かくも違うものかと考えさせられる。「雑草」の言葉の持つひびき（ニュアンス）も地域や民族が異なればこんなにも印象が違うものかと改めて感じた。世界的に見て、日本が西欧に比べて雑草科学の研究が特に進展した理由かもしれない。ちなみに「風土」（1935）は哲学書でありながら、農業経営の講義にもよく登場した本である。

近年、地球温暖化への対策が焦眉の急となっているが、農業の中でも、畜産が温暖化に関わりが大きいことがさほど知られていない。牛など反芻胃から出るメタンの温室効果はCO₂の25倍ほどにもなり、世界全体の温暖化原因の15%に達するとも言われる。畜産農家の生産意欲を大きく削ぐような知見ではあるが、最近の植物性プロテインによる代替肉利用の世界的動きの背景でもある。

温暖化や気象災害の多発、コロナ禍など、地球規模の環境問題や災厄に対し、古い時代から先祖が積み上げ、地道に克服を重ね、現在も取り組まれている研究から生まれる人間の叡智で（過去に戻るのではなく）解決策が何とか見いだせないものかと思う。雑草をゴミなど無駄にすることなく、ヨーロッパのように「闘い」が不要で持続的な営農活動を行っていく方法はないものだろうか。そうした永続的な生産活動のありかたとそれを支える技術開発が現在最も求められていると思う。

夢物語かもしれないが、あぜ草の使い途から農業技術の将来に対する期待へと思いを巡らせてみた。